

あそ 6
2008





隠れあふ幹しづかなり春の森

三橋敏雄

昭和四十四年四月二十八日

(高台廻りに)

喜孝蔵

あを

六 月



貌 鳥

本三宮前

佐藤喜孝

目の前に落ちてきさうな春の雲
巻貝がごろんと倒れ春の海
貌鳥のうしろから見ると水鏡
立浪草みな南に波立てゝ
草色の男になつて水夕べ

熊谷草重たげにはた軽さうに
石佛や露草の露消えやらす
庭先に狸悠悠草の餅
縁側のありてなぐさむ紫木蓮
春陰や蹲踞灯笼苔むして

千駄木

芝 尚子

鎌倉散歩

宝仙寺前

芝宮須磨子

高みよりさくらさくらの段葛
新人のきりりと立つや白木蓮
たんぽぽの色鮮やかに日の下に
若人に手を添へられて花の山
花のころ逝きし妹の歌愛し

輪島

定梶じょう

春愁は猫にもありぬ塀の上
妻子と出づる夜逃のごとし朧月
花月夜暮坂といふ在所かな
春月下乾く東子の存在感
春尽きてバスや高速京都市行

所沢 須賀敏子

真つ直ぐの脚再びや姉の春
鈴蘭や娘は二児の母となり
大きめの帽子重たげ入園児
散歩タイム遠足の子と擦れ違ふ
花冷えや今朝の挨拶咳ひとつ

筍に付いてゐる土黒黒と
好物の筍飯をまづ供へ
腰痛の消えてはもどる桜冷え
句作りも倦むしばし頬杖目借時
からつぽので虫ころり二月逝く

本三宮前

鈴木多枝子

呼子笛

だしぬけに高音発す木の葉笛
笛吹川堤のさくら咲きをらむ
麦笛や幼きころの同じ音に
蛇が来と夜の口笛をたしなめらる
新入生道わたりゆく呼子笛

浦和 竹内弘子

春障子

樟若葉好きと新任教師かな
舎人線菜の花畑の上通る
紫木蓮風に崩るとき迅し
句会とてどこか華やぐ春障子
この家は昭和の匂ひ蔦若葉

田端 田中藤穂

藤 穂 邸

白 金 東 亜 未

天井の高き旧家に春句会
足を投げ緑の庭のひと日かな
文豪の原稿に朱や草若葉
虫喰の白金古地図著莪の花
三光坂古地図にもあり芽山椒

晚 春

四 日 市 長 崎 桂 子

蒲公英や葉に棘もちて他を刺さず
飛上がる蒲公英の絮狼煙めく
花曇テープぐるぐる足の補助
春愁やいつもお供は強い風
世にすねて花壇を壊す春愁ひ

漱石の小さき董に出合ひたり
犬を呼ぶ口笛らしき春の闇
噴水に春の虹立つ美術館
万葉の山見ゆる街春夕焼
留守の間に牡丹咲き満ち姉逝きぬ

さいたま

早崎泰江

なくじやくる迷子もよけれ幟の日
墓を出て紋白蝶になつてゐる
指先に言葉の溜るさくらんぼ
母の日の花束を抱き妻にも紅
母の日やをとこは笑ふこともなし

余丁町

堀内一郎

新宿 森山のりこ

紫木蓮肩の力のふと抜ける
春霖や体内時計狂ひしまま
壺すみれ一株貫ふ垣根越し
山椒の芽鋭き刺の隠れをり
陽炎の林道さつと犬過ぎる

新宿御苑

上高田 森理和

降つて来し百合の樹の花折る鳥
たんぽぽは球形の絮原一面
細波を葉裏に映す若楓
一輪の魁菖蒲絹小町
藤棚の畳半畳紫雲の香

立てられし畝の並びて浅き春
スタートの一笛待ちし春の風
犬の毛にふりて絡まる桜葉
犬猫に定めの有りし郁子の花
メタポリック白きスニーカー届きけり

見沼 山莊慶子

田 端

遠き日の扇小皿や花の中
子規の筆なる絵日記の春かなし
童橋わたり犀星の庭ざくら
春の昼古地図でさがす竜泉寺
さりげ無く見せて夏萩鉢植に

本三西 吉成美代子

青葉

鹿手袋

渡邊友七

青葉木菟夜道のもろさ支えたし
耳鳴の夜鷹をさそひ月曇る
寝落つ間の山音太り青葉木菟
春愁の泉となりぬ厨水
蠅生れて宙とぶ過去に相触れじ

清瀬

赤座典子

龍之介の嘆きたる坂春埃
三汀の目を剥く河童春寒し
強東風や波山の縁辿りをり
犀星の庭石に大き八重桜
昭和の家に古地図のありて春ふかし

桜ヶ丘
安部 里子

マーラーの最後の曲の冴えかへる
高齢者下に下のにの四月かな
ベランダにロダンの猫のごとくある
黄塵やシルクロードの便りのせ
花冷えの体内時計針とばす

新 茶

向 島
遠 藤
実

時代劇悪事を暴き古茶新茶
兵の日の話は長し新茶汲む
古井戸も名水となり新茶かな
晩学の文房四宝桃の花
耳痒し税務署員とのむ新茶

さつき雨

名古屋

王

岩

中国や悲しき五月涙川
家破れ中国は在る山若葉
震災よお前に負けず白牡丹
漲らふ若葉の命瓦礫より
泣くなよと齒を食いしぼるさつき雨

強東風に髪とばされつ背を伸ばす
木蓮の花びら踏んで庭手入
木と紙の家の名草の芽の育つ
山椒の幹の太さに芽の揃ふ
縁側の硝子戸に春ゆらめける

逗子

鎌倉喜久恵

川崎 木村茂登子

四月馬鹿かとい瞬いい電話
茹でたまご素直に剥けず春の風邪
著莪の花波打つ厚き葉の中に
大木の葉がふはふはとみどりの日
いてふ並木昨日より今日みどりの日

田端文士村

銀座 篠田純子

あたたかや文士の古き相関図
谷町のかつて田端にうららけし
犀星の庭石を踏む八重櫻
ばらの棘のやはらかくあり石灯籠
土の香や庭の隅より著莪あかり

雪を膝かはりに膝枕をすることがあるのだろうか。現実味の薄い気がするがどうだろうか。

俳句は子規以降、「今」という時点に立つて句作するのが暗黙の了解となっている。比率はわずかであるが、過去の思ひ出の中に立ち句を作る例もある。「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉 与謝蕪村」は歴史の中に立つて句作をしてゐる。小説の世界では未来の世界を描く作品はざらにある。俳句の場合はどうであらうか。未来に行つてそこで作られた作品はあるのだろうか。あるのだが、私が

膝枕するべき雪をそこそこ

松崎 豊

『雷魚』より 佐藤喜孝

気がつかないだけなのだろうか。きつとさうなのだらう。

私はこの句がさういふ考へで作られたのではないかと疑つてゐる。

雪は降つてゐる間は寒々としてゐる。しかし雪が止み積つた雪に日が当たると雪の様相が一変する。ふんはりとした曲線は本当にあたたかさうだ。

大判の布団ずり出す屋根の雪

石森 和子

「するべき」きつとするであらう雪が、あたたかい日差しの中にある。そこ
にうたた寝をしてゐる作者が見えてしまつたのであらう。

花梨もぐあたりの雲にふれながら	佐藤喜孝
春の藻を足にからませ潮だまり	篠田純子
三楹の花や晴のち曇の日	芝尚子
白塚に積年の苔春陽なか	芝宮須磨子
春風の堤長うして竿竹屋	定梶じょう
春きざす手術の姉の笑顔かな	須賀敏子
桃の花濃し薄き日の下ならば	鈴木多枝子
隈笹を撫でて枯音起さしむ	竹内弘子
朧夜の一枚あけてある雨戸	田中藤穂
豆腐屋の喇叭過ぎゆく復活祭	東亜未
白魚を食むひとときを黙しけり	長崎桂子
朝食は蜆汁なり海の宿	早崎泰江



前月作品

鯉のぼり深呼吸してまた泳ぐ	堀内一郎
指先に痛みが残る桜冷	森山のりこ
雛のごと温もりありぬ露の臺	森理和
街中や鶯の声つゝぬけて	山莊慶子
春の海よりつぎつぎと波頭	吉成美代子
母の忌や記憶に春の雪降り	渡邊友七
まんさくや出会ひ昔のことなれど	赤座典子
飾らねば雛の心の如何ばかり	安部里子
朝市の浅蜷の値札金釘流	遠藤実
囀のうひうひしくて風和げり	鎌倉喜久恵
モーニングサービスの温泉玉子花ぐもり	木村茂登子
初桜余命宣告ものともせず	斉藤裕子

喜孝 抄



六月作品より

田中藤穂・佐藤喜孝

枯野の句書くにたばさむ旅靴
水鳥の發ちたる水の果然と

佐藤喜孝

一句目は、作者は今枯野に立っているか、あるいは枯野を過ぎてきたのだ。小さな句帖を出して今浮かんだ句を書きとめようとしている。提げていた旅靴をおもむろに脇にたばさんで、うつむきながら、一心に。書くにたばさむの措辞でその姿が順を追ってありありと見えてくるのが作者の力量だと思う。

二句目、寄り集って静かに水の上に浮んでいた水鳥が、一斉に飛び立ったのだ。沢山の水鳥の脚に蹴られた水面は波立ち、ざわめき止まない。突然に蹴られ取残された驚きと落胆と淋しさで果然としている水。よく解る句だが、こういう事をこういうふうに詠んだ句を見たことが

ない。喜孝氏の多様な才が冴えている。このような句を作りたいものである。

さくらさくら三行半を反故にする

篠田純子

純子さんは、あをかき集作品で受賞された。私もいつも楽しみにしている方である。純子さんの句はいつもかすかな危機感をはらんでいる。大変なのだがその大変さを楽しんでいるようにも見える。

三行半は昔は夫から妻へつきつけたものだが、今はその逆もあるようだから、夫もうかうかしてはられない。以前テレビで、昔の本物の三行半を見たが、ちゃんと書式があつて三行と半分になるのである。「この度私〇〇は妻〇〇を離縁いたしました。」そのあとが面白い。「よって今後何處へ縁づいても異存これなく候」とある。これは大変親切に思えなくもない。

さてこの句は「別れるか」「いいですよ」など、少々戦闘状態にあったのが、桜の咲くころにはすっかり元の仲のよい状態に戻って三行半は不用になったということのようだ。先づは目出度し。句材が新鮮で、さくらさくらの遊び心も面白い。

茶柱が傾きかけてゐる長閑

芝 尚子

この句には時間の経過がある。湯呑の中に立った茶柱に気付いて見ていたら、その茶柱が水気を含んで少し傾いてきた。そのうちに横になって湯呑の底に沈むかも知れない。それをゆっくりと見ている作者も、小さな茶柱の変化も、とても長閑、作者はその長閑を充分に楽しんでゐる。尚子さんの句には、人生を重ねてこられた方の風格が感じられる。

春一番花屋に足のふみ場かな

定梶じょう

花の市場から花屋に荷が届いたとき、荷ほどきした花が店の床一杯に拵げられて、足のふみ

場もない状態になることがある。けれどその中に足のふみ場は作つてあるのだ。季語の春一番との取り合せもいい。上手な句。

病院のパジャマ姿も春の色

須賀敏子

病院の入院患者はパジャマが日常生活の服になる。女性の患者はいつも割合明るい色を着ているようだが、春がきたら、一層明るい楽しい色の人が増えたのでしょうか。それを素早く感じ取つて一句にされたのは、敏子さんの人柄も明るいからだと思えます。

隈笹を撫でて枯音起さしむ

竹内弘子

深い深みのある作品です。これを俳味というのでしょうか。私はまだ俳味のある句が出来ません。修業不足です。

聖金曜背高き子の割烹着

東 亜 未

上五と中七下五の言葉があまり関係がないよ

うでありながら微妙に響き合っているのは、聖と背の音の重なりで何か清らかさのようなものが生れるのだろうか。聖金曜を若しも受難日の変えたら、それは出ないと思う。割烹という単純な型のものを身につけた背の高い子が、働きながらふと両手をあげたら磔刑のキリストの姿に通うかも知れない。不思議な一句です。

白魚を食むひとときを黙しけり

長崎 桂子

魚屋の店頭で白魚が出ると、春を感じる。近頃少なくなつた季節を感じられる食材だ。それを戴くときも、嬉しさやらありがたさや、何となく他のものとは違う気持になる。それで自分も皆も黙って白魚を味わっている。食むひとときを黙したということ、様子も気持もよく伝わってくる一句です。

雛のごと温もりありぬ服の臺

森 理和

露のとうを摘んだら、日の温みでしようか少しあたたかかった。理和さんはそれを雛のごとと仰っている。理和さんは、植物にも、蜻蛉や目高や小鳥にも実に細やかな愛情を持っていて、私など及ぶところではない。

露のとうの温もりを、雛のごとと感じたのも、理和さんならではの感じ方で感動しました。

春の海よりつぎと波頭

吉成美代子

佐島へ吟行した時にご一緒に見た光景が浮かびます。本当にこの通り。でもなかなかこう伸びやかに一句に出来ない。とても気持のよい句だと思えます。

まんざくや出会ひ昔のことなれど

赤座 典子

典子さんは、まんざくに何か思い出がおりようです。ご主人様との出会いでしょうか。こういう呟きのような句もいいなあと思いまし

た。

遠足の列呑み込んでバス重し

鎌倉喜久恵

これも佐島吟行の折、帰りのバスに途中からボーイスカウトの遠足の子達が乗ってきてバスはぎゆうづめになりました。次からのバス停で待つていた人はもう乗れなくて気の毒でした。呑み込んでバス重しは適確な表現だと感心、ユーモアを感じられます。

モーニングサービスの温泉女子花ぐもり

木村茂登子

モーニングサービスを仰りたいのですが、字数が多すぎて無理に思われます。朝膳の、にしても春のよい雰囲気の一句になるのではないのでしょうか。

花の下遺骨となりし母とゆく

齊藤裕子

亡くなられたお姑様の一連胸に迫ります。母とゆく、は、母に蹴く、か、母抱きゆく、としたり如何でしょうか。長女のお姑様の葬儀の

時、骨壺を抱いた長女が「まだ暖かいのよねえ」といって私を見た顔を思い出しました。裕子さんと同様、心の通った嫁姑でした。(以上・田中藤穂)

朧夜の一枚あけてある雨戸

田中藤穂

「春宵一刻直千金／花有清香月有陰／歌管楼台声细细／鞦韆院落夜沈沈 蘇軾」「月も朧に白魚の／篝も霞む春の空／つめてえ風もほろ酔いに、心持ちよくうかうかと お嬢吉三」「月はおぼろに東山／霞む夜毎のかがり火に／夢もいざよう紅桜 祇園小唄」「朧夜の胡弓に苦力の唄はづむ 高島茂」などと古今を問はず春の夜は詩歌に愛誦されている。掲句、今の世情からすると不用心で……などと無粋な方へ気が向いてしまふかも知れない。「一枚あけてある雨戸」と感興を物に託す俳句表現の王道を行く。「あけてある」のあるになほその感を強くした。(喜孝)

雛の家

定梶じょう

雛の家単線鐵路裏を過ぐ

ちんどん屋吾れが笛吹く春の夢

くらがりに牛の反芻星朧

月光に咏えきれざり椿落つ

赭土に大き蝶なり影印す

春果てぬ猫のひつかくトタンの堀

春濤の流木を押す押しきれず

たんぽぽにたんぽぽの絮無一文

植田澄み電柱変圧器が写る

瓦スタング聳ゆ五月の景として



近世俳諧と漢詩文 八

王岩

少年行

青柳に驕る白馬を繋ぎけり

几董

「少年行」とは、楽府雑曲の歌辞で、行は歌詞の一体。多くは肥馬に乗り、軽裘で都大路を駆逐して楽しみを尽くす若者を詠む。このような「少年行」をつけた几董の「青柳に驕る白馬を繋ぎけり」の背後に崔国輔の五絶「少年行」と、王維の七絶「少年行四首 其一」があると考える。

遺却珊瑚鞭、

珊瑚の鞭を遺却して

白馬驕不行。

白馬 驕つて行かず

章台折楊柳、

章台 楊柳を折る

春日路傍情。

春日 路傍の情

章台は長安の遊里として栄えた繁華街で、江戸の吉原に当たる場所であろう。二十文字に込めた華やかな都長安の艶っぽい五絶である。「折楊柳」は古楽府の別離の曲であるが、遊女がわが身を楊柳に譬える歌もある（注1）。「章台折楊柳」は、起承句を受けている。表面的に解釈すれば、「珊瑚の鞭を忘れたので、鞭の代わりに楊柳を折った」ということだが、「楊柳を折る」の本意は「章台」という色町で遊女と戯れる様子を暗に仄めかす描写であろう。この五絶は『唐詩選』に載っており、南郭は『唐詩選国字解』で、転結句について、次のように解釈した。

章台の遊女どもと戯れて、春日ののどかな道ばたで、左へより、右へより、慰さんでいる。

新豊美酒斗十千

新豊の美酒 斗十千

咸陽遊俠多少年

咸陽の遊俠 少年多し

相逢意氣為君飲

相逢うて 意氣 君が為に飲む

繫馬高樓垂柳邊

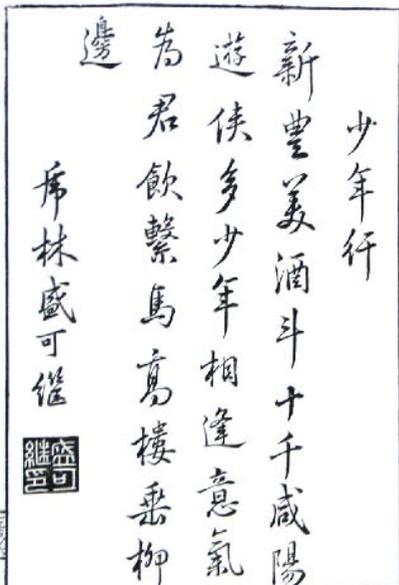
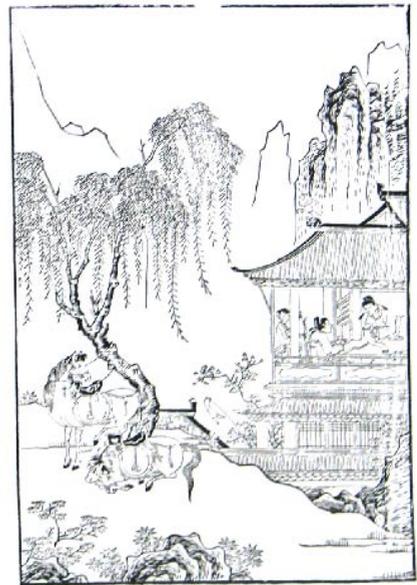
馬を繋ぐ高樓 垂柳の辺

王維の「少年行」は、始皇帝に關係が深い咸陽の若い男たちの伊達や豪奢な遊び振りを描いた。花の都で邂逅した若者たちは意気投合し、「一献を傾けようじゃないか」と、馬を遊郭の枝垂れ柳に繋いで登楼していく様子を描いている。

几董の師である蕪村は有田孫八宛六月八日付け書簡の中で下記のように書いている。

五月己来とかく疎懶にくらし候て、はかばかしく画も不仕、只柳巷花街にのみうかうかと日を費候。壯年之輩と出合候が老を養ひ候術に候故、日々少年行、御察可被下候（注2）。

すなわち、柳巷花街に日を送る様子を「日々少年行」と表現した。これで、「少年行」とは「色町へ遊びに行く」ということと、几董の認識にあったであろう。



井上

几董も「少年行」の詩を愛読したはずであるから、二首の「少年行」を融合した「青柳に驕る白馬を繋ぎけり」を詠むことができた。

いきり立つ白馬と嫋やかな青柳、鮮やかな配色で鮮やかなイメージを浮彫りにした、艶っぽい意味をうらに秘める句ではなかるうか。

注：1、唐・五代の詞（無名氏）「望江南」がある

莫攀我、
我に攀じること莫れ

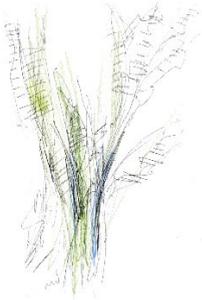
攀我太心偏。
我に攀じると心が偏りすぎる

我是曲江臨池柳、我
是れ曲江の池に臨む柳

這人折了那人攀、この人は折つたらその人は攀じる

恩愛一時間。
恩愛は一時の間のみ

2、大谷篤藏氏・藤田真一氏校注『蕪村書簡集』（岩波書店 1992年9月16日）396頁



高井几董

ぬつくりと寐て居る猫や梅の股
やぶ入の我に遅しや親の足
転び落し音してやみぬねこの恋
日は落て増かとぞ見ゆる春の水
絵草昏に鎮おく店や春の風
途にあふて手昏披ケば春のかぜ
春雨や鼻うちくぼむ壬生の面
燕や流のこりし家二軒
風呂の戸をあけて鴈見る名残哉
きじ鳴や暮を限の舟わたし
虹の根に雉啼雨の晴間かな
はづかしと客に隠すや田螺あへ
うら店やたんすの上のひな祭
松伐しあとの日なたや山桜
咲出てあらせはしなの桜かな
腸を牡丹と申せさくら鯛
董野や今見し昔なつかしき

表具師が無沙汰呵りつ焔の名残
あかつきや地震の後の杜鵑
筍に括り添たりしやがの花
麦哥の声まね行や琵琶法師
湖の水かたぶけて田植かな
酒ゆるす医師も見えてゆふ涼
涼しさや花屋が店の秋の艸
水のめば腹のふくるゝあつさ哉
贗物のいく代めでたし虫払
山寺や縁の下なる苔しみづ
手に持ば手にわづらはし夏羽織
わすれぬし帷子ありぬ妹が許
瓜冷す井を借りに来る小家哉
艸の戸や秋の日落てあきの月
名月に富士見ぬ心奢かな
かなしさに魚喰ふ秋のゆふべ哉
石寒し四十七士が霜ばしら
わかき人に交りてうれし年忘
八十の老に親ありとし木樵

あをかき集

(六人目以降五十音順)

切株は雨中たのしもひこぼゆる

定楯じょう

石畳牛車が軋む春の夢

椿落つ岬の道の長ければ

日のあたる玻璃あれば虻唸りに来

路地うらををんな名前の男猫

篠田純子

ふらここをこつそり漕ぎて誕生日

花の雨かんじん縊で指括る

白魚舟湧くやうにゐてとんびかな

酢漿草や蟻のうろろ何搜す

森 理和

切株や草木瓜の朱のあやなせり

山桜遙かな街の島と浮く

葉桜や見上げて過ぐる言問橋

恙なく父母の揃ひて入学式

赤座典子

雪残る越後の里に麦青む

春愁てふ言葉を知らぬ頃のこと

石井桃子さん

春の雲百一歳の乗り給ふ

浅蜩鳴く声を聞きつつ寝入りけり

鎌倉喜久恵

山査子の垣の傍ら約束す

少女らの自転車つらね春叫ぶ

吊皮に指あそばせて四月馬鹿

春の海光りてやまずヨットの帆

田中藤穂

三月の太平洋に逢ひに来し

さくら貝少女が父へ馳けてゆく

火の国の旅の終りを茅花飛ぶ

春の雲百一歳の乗り給ふ

池の面に蓋するごとし花吹雪

安部 里子

長旅の異国の孫の春たより

芝宮須磨子

春旬の味を加へて夕餉かな

新年度電卓たゞき予算くむ

花粉症迎へ打つ術なかりけり

抜け道の静かな家の山法師

たんぽぽの丈そろはずに咲きそろふ

春寒やすれちがひざま会釈され

花大根一輪車の子の赤き頬

遠藤 実

花衣指の先までざくらいろ

須賀敏子

卯の花や麦飯喰ひし頃の夢

産土の神の社の山桜

露こぼす卯の花白し変声期

かたくりの湯の片栗が咲き揃ふ

やさしさが背を流れけり木の芽晴

柔らかき茶の芽を摘んで天ぷらに

天上天下かくあるべしと花まつり

木村茂登子

漉餡の少し食み出す桜餅

鈴木多枝子

春雷に明け釈迦牟尼の誕生日

もつれては風の解きたる糸柳

美僧と和す般若心經花まつり

聞きたきこと聞かせたきこと花の雨

八重しだれ染井も卒業記念の日

賞味期限気にしつ過ぎる寒卵

庭石に添うて華やぐ著莪の花

芝 尚子

錦鯉撥ねる水音緑さす

東 亜 未

自轉車に積む子はふたりみどりの日

蕾とて花の散るとて集ひけり

下町の猫も江戸っ子かしは餅

方違へしたきほどなる春嵐

ひとり身に母の日の花とどきけり

雨のあと楓の花を黙と掃く

なめらかな音色の窓や春の宵

長崎桂子

峰峰の色を暈せる春の宵

春の宵雨戸引くのを惜しみある

別れ霜まだら模様明けの畝

良き事も些か残し菜種梅雨

青き踏む杖に寄り添ふ盲導犬

あたたかき土こぼしつつ野蒜ぬく

海女潜る見守る夫の目の優し

蝶蝶の小犬からかひ低く飛ぶ

薔薇の花匂へり嫌なこと忘る

霞たる島との間にヨットの帆

揺るる度ジャスミンの香の新しく

かざす手の脇より五月の風抜ける

青田の面風が風追ふ月の暈

青き空ひるがへしては初燕

犬ふぐりおのれ輝くいろに咲き

選ををへて

竹内弘子

浅蜷鳴く声を聞きつつ寝入りけり 鎌倉喜久恵

「浅蜷」の砂を吐かせるために、浅蜷を入れて水を張った小鉢が台所に置いてある。『キユ』とか『チュ』とか聞えるのは、水を吐く音である。耳をすましているわけではない。いつの間にか「寝入」つている。〈吊皮に指あそばせて四月馬鹿〉とともに、俳諧味の濃い面白い作品だと思いました。

三月の太平洋に逢ひに来し 田中 藤穂

月の半ば頃、逗子海岸の吟行があった。三月にしては夏のような日差しが一杯の磯辺に立ったとき、「太平洋に会いに来し」が実感された。東京でも海を間近に見る事は出来るが、大小の岩が突き出ている海草の籠えたような匂いは磯辺ならではである。遠くから寄せては返す白い波、ずっと手前の貝殻を

砕いたような砂浜では、若いお父さんと小さい女の子が楽しそうに遊んでいた。

切株は雨中たのしもひこばゆる 定梶じょう

樹木の「切株」や、老樹の根もとから伸び出る若い芽を「蘗」（孫生えの意）といいます。「ひこばゆるひこばゆる」と、動詞として用いることもあるようです。「雨中たのしも」生き生きした若芽の喜ばしげな様子がわかります。

ふらここをこつそり漕ぎて誕生日 篠田 純子

大きな公園ではないようです。鉄の鎖で吊り下げたブランコは、前後にこぐたびに音を立てる。夜かも知れないが、辺りを気遣っているというより、「誕生日」をしっかりとやり過ごしたいというニュアンスが感じ取れます。

山桜はるかな街の島と浮く 森 理和

四国の松山城は、ケーブル・カーで上り下りできるので苦にならなかったが、急な階段を上った天守閣から、薄霞の中に見た松山の街はこのとおりであった。海に浮んだ「島」のように見えた。「島を浮く」が巧み。

春愁てふ言葉を知らぬ頃のこと 赤座 典子

明るく活気に満ちた春は、反面ふともの悲しさにおそわれる。淡い感傷のようなものである。筆者も俳句を読むようになって覚えた言葉のように思う。知ってから意識するようになった気がする。掲句の感じがよくわかる。

〈春愁やくらりと海月くつがへる 楸邨〉

花粉症迎えうつ術なかりけり 安部 里子

数年前、古い小学校を公民館にした一室の会合で床の据置きストープの第一風（ふだん使われていなかったらしい）を浴びたとたん、ハナミズ嚏が止ら

なくなつた。耳鼻科ではブタクサとホコリといわれた。治ると煩わしかったことをわすれる。

卯の花や麦飯喰ひし頃の夢

遠藤 実

そういえば、とろろご飯を食べるときのほか、「麦飯」は食べなくなつたが、麦どころか五穀米と称する物もあり「麦飯」よりモソモソしない食感があるようです。

春雷に明け釈迦牟尼の誕生日

木村茂登子

仏生会、降誕祭などともいう。四月八日、本堂の前に花で飾つた小さな本堂を作りその真中に、天上天下を指さした小さな釈迦像を安置した上から甘茶を灌ぐ。灌仏会ともいう。「春雷」が象徴的である。

下町の猫も江戸っ子かしわ餅

芝 尚子

「猫も江戸っ子」が面白かつた。犬を飼つた経験では、齒に粘るものは好きではないようだったが、

芝家の猫はおかさんに少しづつ取り分けてもらつて食べているのかもしれないと思ひました。

新年度電卓たゝき予算くむ

芝宮須磨子

長年、お近くの有名なお寺の門前町で食堂を開いておられる。この一年の「予算」を組んでいるというのだ。第一線で働き続けておられる。脱帽である。

花衣指の先までさくらいろ

須賀 敏子

お孫さんを連れて、所沢航空記念公園へお花見に行つたのでしょうか。桜の花はもちろん、名称どおり航空発祥記念館、子供の広場、庭園、茶室、図書。たくさんの樹木、花々を配した庭園、長女の子が小さい頃、毎日のように行つていたようです。春は殊に「指の先までさくらいろ」に染まるほどだったでしょう。巧い表現です。

聞きたきこと聞かせたきこと花の雨

鈴木多枝子

雨でお花見が中止になったのでしようか。風雨でもなければ傘をさして出かけて、花の見えるレストランかコーヒーショップにいらっしやればと思います。心ゆくまでお話になることです。声に出して会話をすることが大事です。

錦鯉撥ねる水音緑さす

東 亜 未

昨年、吟行で作者の蓼科の森深い山荘に寄せていただいた。居間から顔を出すとすぐ、山から引いた水が涼やかな音を立てる池があり、岩魚が塊つて泳いでいた。「緋鯉」もいたようです。鬱蒼と樹々の茂つる間を涼しい風が通り抜けていった。

峰峰の色を暈せる春の宵

長崎 桂子

お住いが四日市なので、遠見の鈴鹿山脈かと思えました。春霞のなか暈わる「峰峰」が刻々と「暈し」のように淡くなつてゆくのでしょうか。美しい夕景です。

あたたかき土こぼしつつ野蒜ぬく 森山のりこ

春の野原や、川の堤を行くと、緑の濃い細い葱のような「野蒜」が目につく。細いのに根が張つていて抜きにくい。「あたたかき土こぼしつつ」で思いのほか柔らかい土だったことが分りました。

揺るる度ジャスミンの香の新しく 吉成美代子

別に「茉莉花」「素馨」ともいう。白い花は芳香があり香水の原料になる。森鷗外の長女が作家の森茉莉。座五「香の新しく」に工夫があつてまとまつていると思いました。

青き空ひるがへしては初燕

渡邊 友七

一読、「初燕」が「空」をひるがえしているのかのような不思議を感じました。この不思議が詩だと思えました。

四月の句会

傳 中野区 カフェ傳

石垣の万朶の花に權休め 理和
 夕月や買ひそねたる桜餅 綾子
 漱石の小さき重に出会ひたり 泰江
 わが影の胸のあたりに鱗蚪ぞわぐ 敦子
 墓参り日延べとなりし桜かな 弘子
 菜の花になにかあるらし群雀 美代子
 目の前に落ちてきさつや春の雲 喜孝
 樟若葉好きと新任教師かな 藤穂
 麦青む米所なる越後にも 典子
 口の辺をほたいて笑ふ蕨餅 喜久恵
 花衣指の先からさくら色 敏子

調 さいたま市岸町公民館

春昼や暗きところに初版本 喜久恵
 仏壇に栗の実二つ新茶かな 弘子
 旧家にて句会賑はふ春惜しむ 東亜未
 龍之介の嘆きし坂や春埃 典子
 犀星の眺めたる石桜散る 綾子
 少し奥まで春の草生ふ縁の下 喜孝
 ふらここをこつそり漕ぎて誕生日 純子
 子規の筆なる絵日記春かなし 美代子
 春陰や蹲踞灯籠苔むして 尚子
 この家は昭和の匂ひ鶯若葉 藤穂

七座句会 ほくと 中野・小川苑

きのふから庭に揺るるは若葉影 理和
 猫追ふて草臥れ儲けの春日なか 恭子
 草の名をいくつか覚え春惜しむ 寒林
 熊谷草重たげにはた軽さうに 尚子
 火の国の旅の終りを茅花飛ぶ 藤穂
 新人のきりきりと立ち白木蓮 須磨子
 筍にふる里の土黒きかな 多枝子
 草屈春はまひるの縁の下 喜孝
 雲が雲よびこむ白水木かな 木枯
 手水鉢猫の喜ぶ春の水 東亜未
 真青なる水にうたかた花吹雪 夏子

あを吟行会 田端・藤穂宅

連句勉強会 七月第一日曜
希望者は 佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会 七月13日
佃の盆踊 篠田純子 (090-9368-3088)

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会のお知らせ

吟行地 佃島・盆踊

日時 7月15日(火) 午後6時半

集会場所 「月島」 駅5番出口

句会場 未定

申込み〆切 7月10日

申込先 篠田純子 090 93683088

八月は「不忍池・蓮の花」(予定)

作品欄の作家名の上に地名をつけてゐる。これはいつ頃から始つたことなのだらう。地名に誠実であつたが止めた。私は祭礼の時に使ふ「本三宮前」。本町通三丁目と宮前通の合体である。どちらにも住んでゐた、ゐる。

地名にご希望がおりの方はお申越しを。

表紙の猫は半ノラの「アリ」。この写真から大分後のことだが怪我をしたので獣医に連れて行つた。獣医が名前を付けて下さいと云ふので妻が「アーリー」とした。翌日連れて行つた息子が「アーリー」は女名前だから「アリ」にしてきたとのこと。産れた濡縁の下から数メートルの所。最初二匹見かけたのだがすぐこの猫しか見なくなつた。興味と警戒心がない交ぜになつた顔に見える。しばらくこの猫の写真を使うことにする。(喜孝)

二〇〇八年六月号

発行日 五月三十日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-98828-4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト

竹徳房

カット/恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

郵便振替 00130-655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263